

## 描かれた幕末の小笠原

―「小笠原島真景図」をはじめとする諸本の成立試論―

鶴岡明美

### はじめに

筆者はかつて、文久元年（一八六一）から二年にかけて幕府が実施した小笠原島探検を機に同島の景観を描いた「小笠原島真景図」（国立国会図書館蔵、以下「真景図」と略す）を取り上げ、その実景描写について検討を試みた。すなわち、巡見に随行した大垣藩医兼蕃書調所絵図調出役の宮本元道（文政八（一八二四）〜？）の作として伝わる本作品には、同島の日本帰属という事実の明確化という当該巡見の主目的が景観を描く際にも反映されていることを、それぞれ具体例を掲げて指摘したのである<sup>1)</sup>。

検討に際して、この作品と共通する図を一部に収録する「小笠原島総図」（国立公文書館蔵、以下「総図」と略す）および「小笠原島群島図」（東京都立中央図書館近藤海事文庫蔵、以下「群島図」と略す）の存在を指摘した。両作例に収録された各図の分析の結果、これらの作例中には、文久二年三月に元道を含む一行が島を去った後、外国奉行所定役元締佐小花作之助（文政十二（一八二九）〜明治三四（一九〇一））以下六名の残留役人

らが八丈島出身の移民とともに開拓を目的として島に居住していた時期に描かれた図が複数含まれていることが明らかになった。さらに「真景図」もこうした図の一部を共有することが照合作業によつて確認されたことから（表1）、「真景図」には元道以外の人物による実景図が含まれている可能性がある、という結論に達したのである。とはいえこの段階では他に判断材料となり得る資料を見出すことができず、小笠原島の実景図制作の成立過程については、未だ疑問の余地を残していた<sup>2)</sup>。

こうした状況の中、右記の点を解明する可能性を持つ資料の存在に気付いた。すなわち『小笠原島紀事』（国立公文書館蔵）巻十九、二十所収の写本「小笠原島真景図」及び首巻凡例と巻二十の巻末に記された付記と、幕末・明治を通じて小笠原島の開拓に尽力した前掲小花作之助（以下、維新後の名である作助と称す）旧蔵の「小笠原島図絵」がそれである。本小論はこれらの資料の検討を通じて、同島を描く実景図の成立経緯についてさらなる解明を試みるものである。加えて島を描くそれぞれの資料が、実景を作品化する際の風景を捉える観点の相違についても言及することにした<sup>3)</sup>。

整理番号	「真景図」	「総図」	「群島図」
乾 - 01	文久三亥年五月朝陽艦ニテ歸府之節航海路	II - 32	
乾 - 02	文久二壬戌年正月軍艦方小野友五郎豊田港測量図	I-1	
乾 - 03	其二	I-2	
乾 - 04	文久二壬戌年軍艦組塚本恒輔松岡盤吉測量図	I-3	
乾 - 05	父島南邊遥望之図		
乾 - 06	兄島ヨリ父島北邊ヲ望之図	I-5	
乾 - 07	父島二見港圖	I-26	
乾 - 08	父島洲崎村圖	I-37	
乾 - 09	父島奥村之圖	I-36	
乾 - 10	大村之圖	I-35	
乾 - 11	大村之図		
乾 - 12	父島北袋澤図	I-38	
乾 - 13	父島南袋澤全図	I-39	
乾 - 14	父島扇ヶ浦圖	I-7	
乾 - 15	湾中望扇ヶ浦図		
乾 - 16	父島北袋澤海濱之図		
乾 - 17	北袋澤岬反顧野羊島図		
乾 - 18	長谿之図		
乾 - 19	常世之瀧図		
乾 - 20	時雨滝之図		
乾 - 21	連樹谷図	I-18	
乾 - 22	父島堺浦図		
乾 - 23	父島 野羊嶋南望母島図		
乾 - 24	父嶋宮ノ濱図		
乾 - 25	巽浦圖	I-13	
乾 - 26	父島大溪之図	I-30	
乾 - 27	父嶋南岬及南嶋之圖	I-16	
乾 - 28	南袋澤至南岬海岸磯傳ひの図	I-17	
乾 - 29	父島 假寝山上より東北を望む図	I-19	
乾 - 30	父島北海岸并兄島図		
乾 - 31	兄島海岸眺景	I-44	
坤 - 01	母島ヨリ母島西北邊ヲ見圖		
坤 - 2	海上望母島北邊図		
坤 - 3	母島沖村圖	II-5	
坤 - 4	母島沖村港之図	II-6	
坤 - 5	母島沖村於テ夷女舞踊之圖	II-4	
坤 - 6	母島南浦之図		
坤 - 7	母嶋山上望姉妹等島圖	II-10	
坤 - 8	母嶋山上北望父島之図		
坤 - 9	母島西浦圖	II-17	○
坤 - 10	母島北村後之山上眺望之圖		
坤 - 11	母島北村港左之方灣中眺望之圖		
坤 - 12	母島北村港野陣之図	II-15	○
坤 - 13	母島東岬石門之圖	II-18	
坤 - 14	向嶋山上眺望之図	I-24	
坤 - 15	母嶋乳房山劔先山等雲中ニ隠現する図		
坤 - 16	母嶋鯨ヶ浦雨中 粟鯨図	II-8	
坤 - 17	母嶋南手之山上喫午飯図	II-21	
坤 - 18	母島乳房山上眺望之圖		
坤 - 19	洋中風波之圖	II-31	
坤 - 20	連日之時化船中困難之図		
坤 - 21	西十二月十九日初見小笠原島圖		
坤 - 22	父嶋港内着船筒拂之図		
坤 - 23	戊三月十日 咸臨丸歸途洋中遇亜米利加鯨漁船図		
坤 - 24	クヌー船之図	II-30	
坤 - 25	クヌー船に装ふ面之圖其一		
坤 - 26	同二		

表1 「小笠原島真景図」リスト（魚貝図を除く） 附「小笠原島総図」「小笠原島群島図」比較

\* 諸本の略称は本文にならう。 \* 「真景図」「総図」は帖および冊ごとに便宜上整理番号を付して示す。  
\* 「真景図」と「群島図」に共通する図は○印で示した。 \* 各図題名の表記はできる限り原図通りとした。

## 第一章 『小笠原島紀事』所収資料の検討

### (1) 成立の経緯に関する記述

『小笠原島紀事』(全三十二巻、国立公文書館蔵。以下『紀事』と略す)は、明治七年(一八七四)に外務権大録坂田諸遠によつて編纂された、同島に關連する記事の集成である。この巻十九、二十が「小笠原島真景図」と題され、前者を「父島ノ部」後者を「母島ノ部」として島の実景を描く図を収めている(以下これを『紀事』所収本と称す)。これらの図を通覧すると、旧稿において検討した「真景図」「総図」「群島図」のそれぞれと図柄を同じくする図を含む写本であることが分る(表2)。さらに『紀事』首巻凡例および巻二十巻末付記にはこの写本成立の経緯を示唆する表記が含まれているのである。そこでまず、これらの表記について検討した上で、その内容を各図の描写によつて具体的に裏付けることにしたい。

「真景図」に關連する資料として、この『紀事』所収本および記述が存在することについては、すでに指摘が見られる。すなわち「真景図」の資料解説は、同館に所蔵される『小笠原島紀事』写本の存在を示した上で、この冊一凡例の記述から「真景図」の作者が宮本元道であるとしている。さらにこの写本の中に「真景図」の写しが含まれるとして、「転写図はかなり劣る」との評価も付記している。このように「真景図」と「紀事」の關連については既に指摘があるものの、『紀事』所収の父島および母島図と關連の記述をさらに詳しく見ていくならば、作品成立に關するさらに詳しい経緯を読み取ることが可能なのである。

実は、首巻凡例の記述(図1)には、真景図の成立に關わつた人物、およびその経緯について明快に記したくたりが存在していた。以下少々長い

が引用する。

一 東京府権大属小花作助八旧徳川家ノ臣ニテ外国奉行ノ属吏タリ忠徳常純等ガ小笠原島巡察ニ随行シ采女正戸田氏直ガ侍医宮本元道八画図ニ長シ是モ俱ニ一行ニアレハ相議リテ全島ノ真景図ヲ製リ(以下略)

\* 以下、引用文は新字体に改めた。

「東京府権大属小花作助」とあるのが、巡見当時外国奉行元締佐であつた小花作之助であるが、彼と宮本元道が「相議リテ」小笠原島の真景図の制作に当たつた、とある。実景図の制作に際して宮本元道以外の人物が関与していたという、旧稿における推測を裏付けているのである。

さらに、同じく首巻凡例の別の箇所における記述を見ると、小笠原の実景を描く図について、さらに具体的に述べられていることがわかる。



図1 『小笠原島紀事』首巻凡例より

独立行政法人国立公文書館



一真景図二本アリ一本ハ作助元道在島中二図スルモノニシテ巻首二小野友五郎豊田港力測量図ヲ載セ尚巻末二鱗介図ヲ加フ是即原本成又一本ハ元道帰府シテ後再校潤飾ヲ加ヘ首尾ノ測量図及鱗介図ヲ除ケ只真景図乾坤トス今紀事二附スルモノハ前ノ二図ヲ対照シ其脱漏ヲ補ヒ加ヘ父島一本鱗介図一本トス

これによると、小笠原島を描く真景図は以下の通り二本存在していたことになる。すなわち①小花作助と宮本元道が在島中に制作したもの。巻首に咸臨丸艦長小野友五郎と按針役豊田港による測量図を掲載。巻末には鱗介図を加えた。これが原本である。次いで②元道が帰府後に再校、潤飾を加え、①の測量図および鱗介図を除いて乾坤としたものである。なお右に記した「鱗介図」とは、「真景図」には「小笠原島所産鱗介図」として附属する一帖に該当すると考えられる。魚類十八図、貝類二図から成るこれらの図は、「総図」第二冊巻末にも大幅な錯簡はあるものの収録されている。加えて『紀事』巻二十一も「鱗介之図」として同図を収めているのである。

一方記述の後半は、上記二本を『紀事』所収本がどのように写したかについての言及である。「今紀事二附スルモノハ前ノ二図ヲ対照シ其脱漏ヲ補ヒ加ヘ父島一本鱗介図一本トス」、すなわち『紀事』所収本は、二本を対照し、それぞれ抜けているところを補ったものとするのである。「父島一本と鱗介図一本」のくたりが実情にそぐわないのが気になるものの、巡見を契機として生まれた二本と『紀事』写本との関係が、ここに明らかに示されていると言えよう。

さらに『紀事』所収本を巡る状況についての詳しい記述が、巻二十所収の巻末付記に見られる。

真景図二本アル旨ハ既ニ凡例ニ云フ如シ原図一本ハ小花作助力所蔵ヲ以テ疾ク本省ニ摹写シ書庫ニ蔵メラル其図又同人力蔵スル所ノ再校図ヲモ借り得テ対照スルニ総テハ大同小異也ト雖モ原図ニ脱スルモノモ亦少カラス因テ画図外務省権少録河野雪巖ニ議リ両図ヲ参考シ其ノ脱ヲ補ヒ此図ヲ製リ写字生中島政信ヲシテ摹写サセシメ以テ紀事ノ巻末ニ附シ参考ノ一端ニ備フ

ここで「原図一本」とは、首巻凡例の記述のまとめにて①とした、巻頭に測量図と巻末に鱗介図をそれぞれ付したという「原本」に該当するであろう。これは小花作助の所蔵であり、すみやかに本省で写され、書庫に収められたというのである。これに対して「再校図」は、同じく首巻凡例の記述より②としてまとめた、再校潤色を加えたものと見られるが、こちらも作助の所蔵と記されている。この記述に続き、両図を対照したところ、全体的には「大同小異」であったが、原図に収められていない図も少なからず存在していたため外務省権少録河野雪巖に議り原図と再校図を照らし合わせ、脱を補ったものを作成し、写字生中島政信に写させたという制作の経緯が述べられているのである。

以上、『小笠原島紀事』所収の記述から、同島の実景図制作をめぐる状況が具体的に浮かび上がってきた。まとめると次の通りである。

- ①小笠原島の実景図は、そもそも小花作助と宮本元道が協力して作成したものである。この両人が在島中に制作した諸図の巻首に小野友五郎と豊田港による測量図、巻末には鱗介図をそれぞれ付したものを原本とする。
- ②①の原本とは別に、宮本元道が帰府後に再校、潤飾を加え、①の測量図および鱗介図を除いて乾坤とした、いわゆる再校本が存在する。これも小花作助が所蔵していた。
- ③原本と再校本の二本を比較すると、原本には収められていない図が再

校本には少なからず見られるため、原図と再校図を照らし合わせ、抜けている所を補った写しを作成し、『小笠原島紀事』に収録した。

## (2) 現存実景図との比較検討

### ① 『紀事』所収本

それではこうした二連の記述を踏まえ、現存する作例の検討に入りたい。各々の作例の相互関係については、(表2)を参照してほしい。

まず『紀事』所収本は、巻十九「真景図 父島ノ部」の全五十六図、巻二十一(同)「母島ノ部」の全三十八図によって構成されている。全体を概観して気付くことは、「総図」に収録される図のほとんどが、ここにも見られるということである。その中には、「群島図」所収の全二十一図中十五図も含まれているのである。

一方「真景図」所収図との比較について見ると、まず「乾」冊については全三十一図のうち二十三図が一致している。『紀事』所収本にない八図のうち四図は冒頭の航路図、測量図および島を遥かに望む図であり、実景を描く図に限定して見るならば、きわめて高い一致度を示しているのである。「坤」冊については二十六図のうち二十二図が一致しており、『紀事』所収本にない四図のうち、一図が実景以外を題材としている。

さらに興味深いのが、『紀事』所収本に収められた諸図のうち、表題の後に「補」と記されているものの存在である。こうした表記を伴う図は「父島二見港図」(図2)をはじめ「父島ノ部」に十八図、「母島ノ部」に十一図の計二十九図に上っている。

注目すべきことに、これらの図はすべて「真景図」に収められているのである。先に述べた『小笠原島紀事』巻二十の巻末付記には、再校本によって原本の「脱を補」ったという記述が存在していた。これと照合するなら

ば、「補」と付された図は、先の凡例にあった再校本、すなわち帰府後元道が再校・潤色を施した際、新たに加えた図を含む本に由来することは間違いないと言えよう。とすればここに、「真景図」と再校本の極めて密接な関係が浮上してくるのである。

### ② 『小笠原嶋図絵』

さらに『紀事』記載の実景図制作の経緯を裏証する決定打となるのが、現在小笠原村所蔵の「小笠原嶋図絵」(以下、「図絵」と略す)である。

本資料は、小花作助の子孫により昭和六十二年に一括して小笠原村に寄贈された百七十点にのぼる「小花作助関係資料」の一つであり、平成四年三月に東京都から出された資料目録にも記載されている<sup>4)</sup>。その後平成二十一年に全図の写真及び本文の翻刻が刊行され、その全貌をカラーで知ることが可能となっている<sup>5)</sup>。筆者は平成二十六年、小笠原村における資料調査において本資料を閲覧する機会を得た。

以下、資料の詳細に移ると、表紙に「小笠原嶋図絵 附録一卷」と題字が記された本作品は、巻頭の測量図、父島、母島を始めとする小笠原島の実景を中心とする図、巻末には文久三年の航路図の計七十二図と、魚貝図二十図の計九十二図から成る。ここでまさきに注目すべきは、本作品と『紀事』所収図との関連である。すなわち『紀事』収録図のうち「補」と記されていない図のほとんどが「図絵」に見いだされるのである(表3)。加えて、巻頭に地図、巻末に魚貝図を収めているという点は、『紀事』巻首凡例に記された「原本」の体裁に関する記述「巻首二小野友五郎豊田港力測量図ヲ載セ尚巻末二鱗介図ヲ加フ」とまさに一致する。こうした類の図絵は複数制作される場合が多く、当該資料そのものが『紀事』所収本を作成するうえで典拠となったと断定することはできない。しかしながら、ここに見られる各図の一致する状況から、この「小笠原島図絵」が『紀事』に記された原本の形式

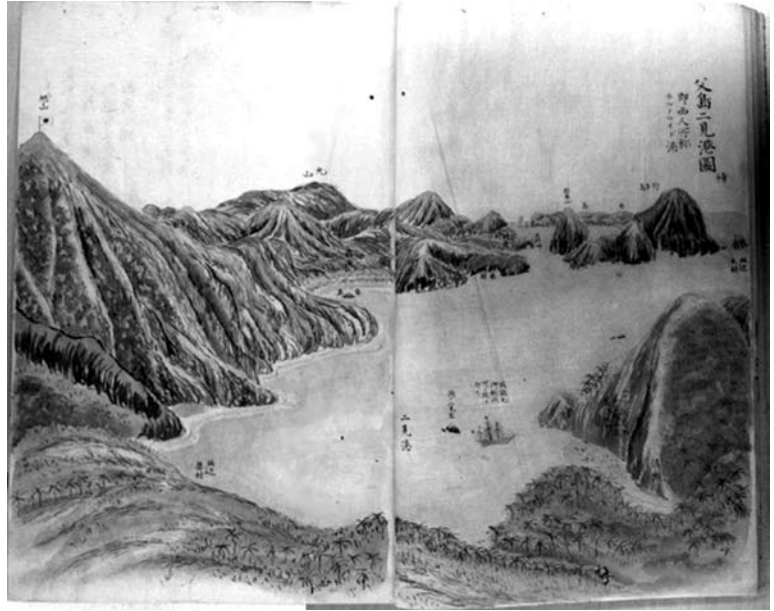


図2 『小笠原島紀事』巻19より「父島二見港図」

独立行政法人国立公文書館

を踏襲する可能性が極めて高いことが確認されるのである。

また、この「図絵」には二図を除くすべての「群島図」所収図が収められている。さらにこの二図にはいずれも「久之写」とあり、「久之」なる人物自身が書いたことを明記している。<sup>6</sup> 加えてこれ以外の図の中には小花作之助所有の図を写したことを記す図が複数含まれているのである。以上の点から「群島図」は、久之が小花作之助から拝借して写した図に自図を加えたも

描かれた幕末の小笠原

のであり、おそらく公の眼に触れることなく伝来したものと推察される。<sup>(?)</sup>

以上、新出の『紀事』所収本、および「図絵」の詳細を検討したが、先にまとめた『紀事』の記述から導き出された実景図の成立経緯とここで得られた知見を照合し、さらなる解明を試みたい。すなわち、『紀事』の記録に現れた二本の真景図のうち、小笠原島探検、およびその後の同島在留の時期を通じて島の実景を描いた「原図」と称する一本に作之助旧蔵の「図絵」が当たることが確認された。いま一本は、元道が帰府後に描いた諸図を加えた再校本であり、原本とこの再校本を比較対照して制作した『紀事』所収本に「補」と付された図を含むと考えられる。国立国会図書館蔵「真景図」にはこれら元道によると思われる図がすべて収録され、しかもそれが全体の半数強を占めることから、再校本と極めて近い関係にあると結論付けることが可能となったのである(表4)。

上記の考察により成立過程の大筋は辿ることができたが、残る問題点として二つほど掲げておきたい。

一つは、「真景図」と再校本の関係である。この両者を同じものであると断じるのは余りにも早計であるのは言うまでもない。なぜなら、前述の首巻凡例の記述中に示された再校本の体裁は「首尾ノ測量図及鱗介図ヲ除ケ只真景図乾坤トス」、すなわち測量図や魚貝の図を除き、ただ真景図乾坤としたものとなっているのに対し、「真景図」は乾坤二冊から成るものの、測量図および魚貝の図の両方を備えているからである。

このような状況から見て「真景図」は、再校本所収の、元道が後日制作した実景図を中核として、測量図を始め再校本では省かれていた諸図を添えて再構成された作品であると考えられる。「乾」「坤」で二冊を成す点も、再校本の体裁に対する意識の表れと取ることができ、両者の密接な関係を示唆していると言える。「真景図」は明治二年(一八六八)、小花の進言により小笠原島の再回収計画を外務卿沢宣嘉に建言した宮本小一の

整理番号	「図絵」
父-01	文久二壬戌年正月軍艦方小友女五郎豊田港測量図
父-02	其二
父-03	文久二壬戌年軍艦組塚本恒輔松岡盤吉測量図
父-04	父島 二月十日朝父島出帆母島へ渡海の節港外二里斗りにして兄弟諸島を重疊して見る図
父-05	兄島見返山より父島を見たるの図
父-06	文久二壬戌夏 父島扇ヶ浦飯御役所并役々控所等之図
父-07	戊四月補理相成扇ヶ浦御役所より眺望之景 其二 (無題図)
父-08	扇ヶ浦 春日雨中
父-09	父島の内 西十二月十九日咸臨丸入港翌廿日上陸 奥村山上へ初て国旗を建し處より眺望
父-10	父島の内 扇浦洲崎の界振分山上より湾中北西の方を見る図 其二 其三 其四
父-11	父島の内 洲崎村英人ウヘブ居宅 野羊山の方より見る図
父-12	父島の内 洲崎野牛山より南方を望む
父-13	父島の内 野羊山大洞の図 亜国水師提督ヘルリ日本紀行此図あり
父-14	洞中より奥村大村の方を見る図
父-15	父嶋の内 南岬及南嶋之圖
父-16	父嶋の内連樹谷図 扇ヶ浦の後二あり
父-17	父島 假寝山上より東北を望む図
父-18	父嶋の内 北袋澤村野伏間谷時雨の滝
父-19	父嶋の内 南北袋澤境 山上より西北の方を眺望す 渓谷山林遠近重疊し湖色も亦紺碧にして島中第一の風景なり
父-20	父嶋の内 旭山 清瀬の方より眺む図
父-21	父嶋の内 奥村 清瀬の方より観望す
父-22	父嶋の内 清瀬大村の方海岸 岩上より見る図 (以下略)
父-23	父島の内 旭山頂上よりの望景
父-24	其二
父-25	父島の内 初寝浦
父-26	父島の内 巽港の景
父-27	父島の内 南海岸千尋岩
父-28	父島の内 南崎前海数十の衆島あり
父-29	父島の内 南崎の赤壁
父-30	父島の内 宮の濱坤の方山上より観望
父-31	父島の内 大村之圖
父-32	父島の内 奥村の耕地図
父-33	父島の内 洲崎村の図
父-34	父島の内 北袋澤耕地図
父-35	父嶋之内 南袋澤耕地の図
父-36	(上) 弟島西の方海上より兄弟并瓢島を見る (下) 其二 兄島
父-37	兄島之内 滝の浦乃奥滝下より前海を見る
父-38	兄島西上頂上より乾の方湾中を観望す
父-39	兄島之内 野陣ヶ濱の図
父-40	父島之内 南島袋港の圖
父-41	父母之内 属島
母-01	(上) 二月十日 父島より母島へ渡海 咸臨丸船中より全島西南山面を見る 姉妹諸島凡て圖外にあり (下) 其二
母-02	母島沖村於テ夷女舞踊之圖
母-03	母島沖村図
母-04	母島の内 沖村港 外国人居留の地 正面南に向ふ
母-05	母島の内 沖村港湾中西の方鯨ヶ崎より巽の方を観望す
母-06	母島之内 沖村の北乳房山より南望の図
母-07	初寝浦を海上より望む圖
母-08	母嶋乃内沖村の北乳房山より東洋の景右の方
母-09	其二 同上より左の方を見る
母-10	母島の内 獅子ヶ谷山上の図
母-11	母島の内 北港
母-12	母島の内 東港
母-13	母島の内 西港の景
母-14	母島の内 東港の岬
母-15	母島の内 二月十九日両全権巡見の節南浦より北の方着船せし處
母-16	母島の内 南浦小富士山 頂上より西北の方を見る
母-17	母島の内 二月廿日巡見の節平島西の方山上より東南に面して姉妹諸島を見る
母-18	母島 属島 平島 北の方山上より東北の方母島を眺望す
母-19	其二
母-20	母島属島の内 (向島・姉島・妹島・姪島)
母-21	兄島野陣濱北港等に於て雨中露宿の体如此
母-22	島中巡見の節山野を跋涉する躰口口如此
母-23	ラハロートト唱…日本人呼て蜻の足といふ 大なるハ高拾間余といふ
母-24	ヘンパームと唱 日本人呼て野芭蕉或ハ野椰子といふ 翰櫻栢に類し高サ拾間余に及ふ
母-25	島中外国人の家屋如図 周囲棕櫚の葉を以て葺く
母-26	島民所用の舟一本を以て掘りてこれを製す クノーと唱ふ
母-27	航海中風波の図
母-28	文久三元年五月朝暘艦にて帰府ノ節航海路

表3 「小笠原嶋図絵」リスト (魚貝図を除く) \*網掛けを付した図は、『紀事』所収本未収録。



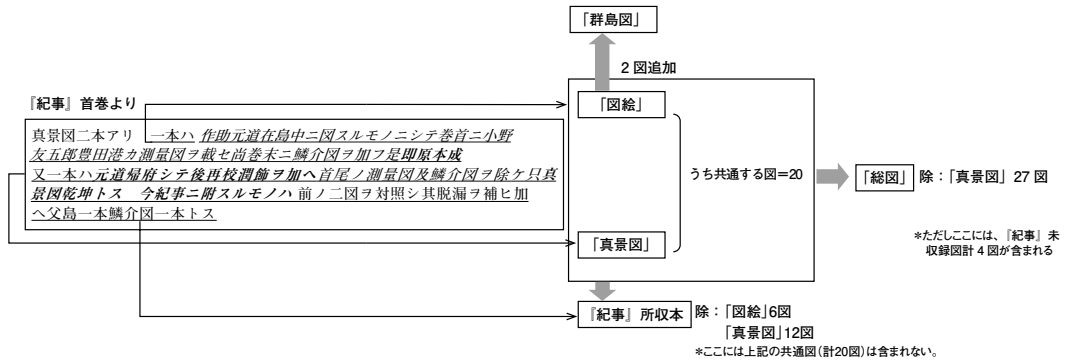


表4 小笠原島を描く実景図諸本の系統図

旧蔵であり、建言の際に他の資料と同様に小花より授けられた可能性が高いことについてはすでに旧稿において指摘した<sup>5)</sup>。一方『紀事』第二十巻巻末付記には、再校本も小花の所蔵であると記されていたことは先に見たとおりである。とすれば、「真景図」および再校本ともに小花の手にあつたこととなり、このことが前者が後者の作品に基づくバリエーションの一つとして制作された可能性を傍証する事実となるであろう。

二つ目は「総図」の位置づけである。『紀事』所収本同様に「図絵」および「真景図」のそれぞれと共通する図によるものの、その構成は『紀事』所収本とは異なるものである。すなわち、「真景図」については計三十図を収録しており、『紀事』所収本の四十五図の三分の

二にとどまる。しかしながら「図絵」所収図については、一か所の錯簡を除いて全て収めている。対するに『紀事』所収本は表3に示す通り計六図を欠いているのである。このように「総図」は『紀事』所収本に見られない「図絵」所収図を含むことから、『紀事』所収本とはまた別の機会に作成されたものと推測される。

## 第二章 小笠原島の実景に対する多様な視点 ——風景趣味と領土意識——

### (1) 漢詩のイメージソースとしての島の実景

「図絵」が、同島を題材とする他の実景図集と比較して著しく相違する点として、複数の図にわたり漢詩文が添えられていることを指摘することができる。すなわち計十八図にわたり、小花作助の名である「邦孚」の他、了庵、翠庵、逸洪、松濤逸人をそれぞれ作者とする漢詩が書き込まれている(表5)。このうち、「翠庵」は残留役人の一人、益田鷹之助であることが分っている。というのも、この巡見に参加した目付の服部帰一<sup>おれが</sup>が残した記録である『南島航海日記』(全五冊、『小笠原島紀事拾遺』巻五)八所収、国立公文書館蔵)において、文久二年の正月元旦および二日の記事に「益田鷹之助翠庵」あるいは「益田翠庵」という記載が見られるためである。また「松濤逸人」についても、同じく残留役人の松浪権之丞ではないかと推察される。他の詩についても、島に留まった人物による作である可能性が高いと思われるが、唯一「了庵」なる作者の詩が常に大きな字で他と比較して広いスペースを占めていることに気付く(図3)。冒頭の図と最終図の両方に詩を寄せていることもその重要性を物語っている。加えて、詩を書き込む順序にも一定の決まりがあるように見受けられる。すな

小笠原嶋図絵	漢詩作者
文久二壬戌夏 父島扇ヶ浦仮御役所并役々控所等之図	了庵、逸決
戊四月補理相成扇ヶ浦御役所より眺望之景 / 其二	邦孚／松涛逸人（其二）
扇浦 春日雨中の景	邦孚、翠庵
父島の内 扇浦洲崎の界振分山頂より湾中北西の方を見る図 ／其二／ 其三 / 其四	邦孚、翠庵／邦孚（其二）
父島の内 洲崎村英民ウヘブ居宅 野牛山の方より見る図	了庵
父島の内 洲崎野牛山より南方を望む	逸決
父島の内 初寝浦	了庵
父島の内 南海岸千尋岩	了庵
兄島之内 野陣ヶ濱の図	了庵
母島之内 沖村港 外国人居住の地 正面南に向ふ	邦孚
母島之内 沖村の北乳房山より南望の図	逸決
母島之内 北港	邦孚
母島之内 東港	翠庵
母島之内 南浦小富士山 頂上より西北の方を見る	了庵、翠庵
母島 属島 平島 北の方山上より東北の方母島を眺望す	了庵
兄島野陣濱母島北港等におひて雨中露宿の体如此	了庵

表5 「小笠原嶋図絵」所収 漢詩作者一覧

\*一図において複数の作者が詩を揮毫する場合、作者名の配列は画面向かって右に書かれた順とした。

わち了庵は複数の揮毫者がいる場合必ず右側を占める。邦孚、翠庵両人の間では、必ず右に邦孚の詩が書かれる。逸決は了庵より左を占め、単独で書く場合も左端に近く詩を書きこんでいる。詩を一図にのみ残す松涛逸人もまた左端に記載が見られる。「了庵」以外の作者については、残留役人の中で一番高位にあった作助を頂点とする身分秩序に基づき、高位の者ほど右に揮毫していた可能性が高いが、了庵の圧倒的優遇が感じられる配置については、この人物の漢詩の技量に対する敬意に由来すると考えるのが妥当であろう。あえて島内にそのような技量の持ち主を探すならば、巡見隊の大半が去った後の文久二年八月に島を訪れた本草学者、阿部棟斎（文化二（一八〇五）〜明治三（一八七〇））は詩人としても江戸の人名録に収録されるほど著名であった。彼が「了庵」と名乗った記録は今のところ見出されていないものの、作者の最有力候補として掲げておく。

漢詩は、例えば父島振分山からの雄大な眺めを描く「父島の内 扇浦洲崎の界振分山頂より湾中北西の方を見る図」（図4）のように、広々とした景観への感興を詠む詩のみならず、春の雨にけぶる海岸の眺めを描く「扇ヶ浦 春日雨中の景」（図5）や、「母島の内 南浦小富士山 頂上より西北の方を見る」のように、山の頂から眺め下ろされた、大風吹き荒れ霧立ち込める海岸の景（図6）など、季節や天候に伴い変化する自然の妙を詞にした詩も見られ、多岐にわたるものである。こうした一連の詩が存在することは、小笠原島の風景が詩興を催す対象として位置づけられたことを示すに他ならない。

何人かの仲間て風景を楽しみ、詩や歌を詠んだりその実景を描いたりする、という楽しみ方は、江戸時代中期ごろから幕末にかけて大変盛んに行われた行為であった。こうしたいわゆる「風景趣味」は、実景を描くという行為を支える文化的背景としてきわめて大きな役割を果たしていた。筆者はかつてこうした現象について、金沢八景、鎌倉や江の島と

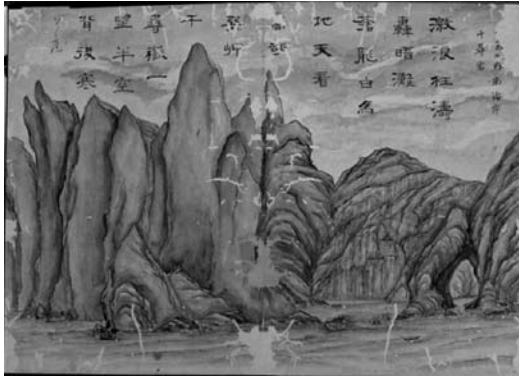


図3 「小笠原嶋図絵」より「父島の内 南海岸千尋岩」  
小笠原村



図4 「小笠原嶋図絵」より「父島の内扇浦…」  
小笠原村

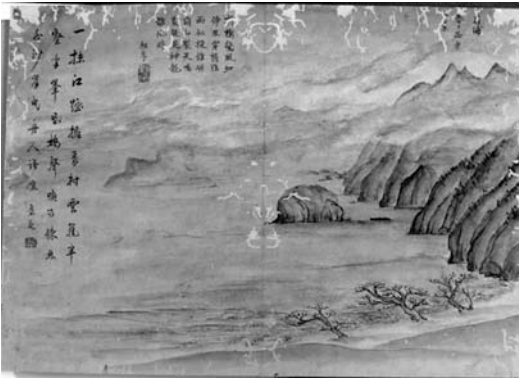


図5 「小笠原嶋図絵」より「扇ヶ浦 春日雨中の景」  
小笠原村



図6 「小笠原嶋図絵」より母島の内 「南浦小富士山頂上より西北の方を見る」  
小笠原村

いった江戸近郊の名勝から富士登山を目指す、江戸後期の画槽白雲による実景図と漢詩を伴う旅絵日記「天然自賞」（寛政九年（一七九七））など、具体例の分析に基づいて論じた。本作品もまた、こうした文脈から語られ得る側面を有しているということができるのである。

小笠原島において巡見の合間に文雅の心得あるもの達によって和歌や漢詩、俳句が詠まれていたことについては、同島滞在中に書かれた複数の人物による日記類に示されている。

まずは、前掲の目付、服部帰一による日記『南島航海日記』である。この中の文久二年正月元日の項に「益田鷹之助翠庵有詩」、翌三日の項には「詩あり：和増田翠庵韻」とあり、「小笠原島図絵」に詩を寄せた一人、外国方の益田鷹之助（翠庵）が詩を詠み、誰かの詩に韻を和したことを記録に残している。また、島に向かう船中でも詩を詠むことに興じていたらしく、十二月十二日の項には自作の七言絶句が見えるほか、この同日、外国奉行支配の田辺太一が富士山を望んで作った一絶に和韻している。さらにこの詩には「宮崎（筆者註・宮本の誤りか玄道写其景）」との註記が付されており、元道が富士山を写していたことが分かる。実景を絵画と漢詩の両方で表現して楽しむ、まさに「風景趣味」の具体相を、この場面においても見出すこ

とができるのである。

一方、本草学者阿部樸齋の在島中の日記『豆嶋行記』（国立国会図書館蔵）および在島中に詠まれた詩歌の書付『出放題集』（同右蔵）からも、残留役人たちが漢詩に興じていた様子を窺わせる記述が見られる。例えば『出放題集』には「明後三日の出航」に際して即興に詠んだ七言絶句が収録される<sup>①</sup>。これに続き「翠庵主人」すなわち益田鷹之助の七言絶句が記されるが、こちらの詩は『豆嶋行記』文久二年閏八月四日の項にも見られるのである。この前日、まさに三日の項を見ると「御艦母島へ行」という記述が見いだされるため、樸齋の即興詩、さらにはおそらく翠庵の詩も、この母島行に際して作られたものと推測される。また、『豆嶋行記』同年十二月十六日の項には、再び翠庵の七言絶句が記される。さらにこれには、「甚作」と読める人物が韻を和し、七言絶句を続けているのである。次いでこの五日後の二十一日には、竹莊林和（林和一郎、以下（ ）内筆者註）、松濤孚（松浪権之丞か）、翠庵讓（益田鷹之助）、喜任（阿部樸齋）の四名で聯句を試みている。この聯句に阿部樸齋が参加していることに注目したい。この事実、「凶絵」への揮毫者「了庵」を樸齋とする前述の推測をいささかなりとも傍証することになると思われる。さらに推測を重ねることが許されるならば、聯句において結句を担当する樸齋の序列が「小笠原島凶絵」における「了庵」のそれと一致していることも、この両者を同一人物とする仮説には有利に働くであろう。

残念なことに、上記の記録類に残された詩はあくまで主として島における生活に対する感慨を主題とするものであり、風景を詠嘆する作は含まれていない。その意味においては、「凶絵」の直接的な傍証になるとはいえない。そのものであるものの、巡見に臨んだ人々が日々の感興を漢詩に寄せ、あるいは漢詩を通じて交流を図っていた様子を如実に物語る資料であるということができらるであろう。

### ③ 島内での制作―和歌や俳諧の場合

また、島内で詠まれたのは漢詩だけではない。服部帰一が『南島航海日記』の中にしたためるのは和歌である。上陸直後の十二月二十二日、鶯の声を聞いて「君が代の春を迎ふる心にや 冬のうちながら鶯の啼」と詠むなど、島における感慨を和歌に託して表現しているのである。また阿部樸齋は先述のとおり依頼に応じて漢詩を詠み、かつ聯句に参加していたが、その一方で自発的に詠み、「楽木」の号とともに『豆嶋行記』に書き付けるのは俳句である。例えば文久三年の正月元日の項には「鶏がなく 東も同じ 初日出」を始めとする三句が記されているのである。

このように、小笠原島をイメージソースとして多彩なジャンルの詩が詠まれていたという点が確認できた。とすれば「小笠原島凶絵」制作に際して小花作之助がなぜあえて漢詩を選択したのか、という点が問題になるであろう。漢詩がまさに小花の得意ジャンルであったということが最も大きい要因かとも思われるが、既に定着していた、実景を描く凶に漢詩を添えるという「風景趣味」を意識していた可能性も十分存在すると思われる。ともあれここには、巡見の後も島に長期にわたって逗留した人々が、領土問題からはいったん離れ、実景図と漢詩という、良い意味で補完しあう手段を用いて、風景体験を始めとする同地での様々な体験から得られた感興を表現して楽しむ、いわば自娛の精神が生み出した産物を見出すことができるのである。

## （2）『紀事』所収本における再構成

前節において、「凶絵」が江戸期風景趣味の系譜に属する作品として、漢詩と実景図の両側面から島の景観を興趣あるものとして捉えていることが明らかになった。対するに、この「凶絵」と「真景図」の両方を参照し

た『紀事』所収本は、また別の編集意図をもって両作品の実景図の再構成を試みている。

第一章において考察を試みた上記三種の資料の関係は、表4にまとめられた通りである。ここで再構成の問題について考察するに先立ち、この三者の関係係をさらに詳しく見ていくことにする。

まず、全ての資料に共通する図の総数は十五図となり、そのうち「洋中風波之図」に「補」が付される以外は図中に「補」の字は見えない。その多くが耕地図や港の景であるこれらの図は、まさに首巻凡例にあった「相議リテ全島ノ真景図ヲ製リ」を具体的に示す例といえるであろう。

また、「図絵」および「真景図」には、測量図・航路図以外で『小笠原島紀事』所収本に採録されない図もそれぞれ存在している。実景を描く図に限って見ると、まず「図絵」では「父島之内 宮の浜坤の方山上より眺望」および「母島の内 沖村港 外国人居住の地 正面南に向ふ」の二図である。

一方「真景図」所収図のうち『紀事』所収本に採録されない実景図は「図絵」の例よりも多く、「父島南辺遙望之図」「大村之図」「北袋澤岬反顧野羊島図」「時雨滝之図」(以上「乾」冊)「母島ヨリ母島西北邊ヲ見図」「海上望母島北邊図」「母島乳房山劔先山等雲中ニ隠現する図」(以上「坤」冊)の全七図にのぼる。これらの図は、原本と再校本をそれほど違わないものとして捉えていた『小笠原島紀事』写本作成者が、不必要であるとして意識的に省いた可能性もあるが、「大村之図」や「母島乳房山劔先山等雲中ニ隠現する図」(図7)などは図学の影響を色濃く感じさせる図であることから、明治に入ってからあたりに加えられた図である可能性も存在することを指摘しておきたい。

上記の関連を踏まえ、『紀事』所収本における編集意図の問題に入りたい。第一に指摘すべきこととして、『紀事』所収本の基本構成は「図絵」

所収図の配列を原則踏襲し、巻十九(父島)および巻二十(母島)のそれぞれ巻末に「真景図」所収図をまとめて「補」字を付して配置するというものである。しかしながら数か所にわたり「真景図」所収図の挿入が見られるほか、「図絵」所収図を欠く箇所も存在し、そこに『紀事』所収本作成者の編集意図を認めることができるのである。

まず「巻十九」の検討から始めたい。「図絵」冒頭の測量図が省かれていることについては前述したが、それに続く「父島 二月十日朝」の前に、「洋中風波之図」を始めとする「真景図」所収の航海中の様子を描く図を計三図、「兄島見返山より父島を見たるの図」の後には「真景図」所収、入港の情景である「父島港内着船筒括之図」をそれぞれ挿入している。こうした一連の措置は、「図絵」未収録の、航海中および入港の情景を冒頭に示すことにより、航海の苦難を表現すると同時に、巡視の偉業をよりアピールする意図をもってなされたものと推察される。

さらに「図絵」はその後「文久二壬戌夏 父島扇ヶ浦飯御役所并役ノ控所等之図」以下、島内の実景を描く図に入るが、『紀事』所収本ではその前に「真景図」所収「父島二見港図」が挿入される。島内の実景を



図7 「小笠原島真景図」より母島の内「母島乳房山劔先山等雲中に隠現する図」

国立国会図書館

描く図の冒頭にこの図を置く構成は、「真景図」にも共通するものである。日の丸が掲げられた旭山を画面左に配し、港を眺望する視点で描かれたこの図が、日の丸という具体的なモチーフと、眺望するという、所有や支配を表現する視点の両方を採用することで、同島の日本領有をイメージによって意図した可能性については既に指摘済である。「図絵」が他の一行が帰国した後の、作之助以下残留役人たちの偉業を記録するかのようになり、開拓民とともに過ごした島における日々を象徴する役所の図を冒頭に配するのに対し、島の日本帰属を象徴する二見港の図を「真景図」に做って冒頭に配置した『紀事』所収本作成者の行為は、かつて指摘した通りの本図の重要性を裏付けるとともに、作成者の意図が「真景図」により近いものであることを明らかに示しているのである。

他の上陸後の実景図について「補」とある図のうち挿入されるのは、「父島 野羊嶋南望母島図」「父嶋宮ノ浜図」「其二 海岸眺景」である。ここで注目すべきは、「父嶋宮ノ浜図」である。先に「図絵」所収「父島の内宮の浜坤の方山上より観望」が『紀事』所収本に見えないことを指摘したが、まさにこの図と差し替えになる形で収録されているのである。宮ノ浜は延宝三年（一六七五）島谷市左衛門による同島調査の際、祠を建てたと報告された場所であり、領有の根拠となる最重要地域であった<sup>1)</sup>。この地を正面から描く「父嶋宮ノ浜図」をあえて挿入している点、「図絵」では図中に強調されることのない「領有」のイメージを補強する演出意図がここにも働いていた可能性は否めないであろう。

次に、巻二十について見ていくことにする。注目すべきは、『紀事』所収本は母島内の実景図を描く冒頭の配列を変更している点である。すなわち「図絵」は「沖村おひて夷女舞躍の図」「母島沖村マツレシ持畑地の図」「母島の内沖村港」の順に配列するのに対し、『紀事』所収本は冒頭に「真景図」所収の「母島沖村港之図」を挿入、「母島沖村マツレシ持畑地の図」

「沖村おひて夷女舞躍の図」として、「図絵」所収の「母島の内沖村港」を除いている。この改変は、父島同様、まず上陸地である沖村港を冒頭に据えることを重視したためであろう。差し替えの理由については判然としないうが、あえて推測するならば「真景図」には父島に戻る咸臨丸の姿が描かれるため、冒頭における一連の図と同様に、巡見における同船の動向をより効果的に示す図と見なされたためではないかと思われる。

以上見てきた通り、「図絵」の内容を「真景図」が補足する形で制作されたと推察される『紀事』所収本の構成には、随所に意図的な演出が施されていた。その意図は、巡見終了後の滞在期間も含む島における観察の成果を淡々とまとめた「図絵」には見られない、巡見の偉業、同島の日本帰属を象徴的にアピールするイメージをより強く打ち出すことにあつたのではないかと思われる。

## おわりに

以上の考察を通じて、幕末期小笠原探検を契機として作成された実景図の成立経緯、およびその実景表現の特質について、次のような新たな知見を得ることができた。すなわち「図絵」「真景図」および『紀事』所収本を照合することにより、巡見を通じて制作された実景図は、「図絵」と「真景図」とそれぞれ同一系譜に属する二本であつたこと、そのうち前者は小花作之助と宮本元道が巡見中に共同で制作した「原本」、後者は帰島後に元道が潤色を加えたいわば「再校本」と見なされていたものに由来することをそれぞれ実証した。また、実景図に漢詩を伴う「図絵」が、江戸期の風景趣味の流行の系譜に属する作品とも見做しうることを、明治初期に編まれた『紀事』所収本においては「図絵」に「真景図」諸図を補う形で行われた編集作業によって、そうした特色よりも、「真景図」に顕著な、島の

日本領有を強調する表現を優先した可能性について指摘した。

今後は「風景趣味」から「領有のイメージの強調」という、風景を捉える際のいわば路線変更が、明治における新たな政治の動きといかなる関連を有しているかについて、視点を明治以降に移し、近代以降の同島を描く実景図の発掘・分析を通じて明らかにすることを課題としたい。

## 註

- 1 「小笠原島真景図」をめぐって―実景表現に反映された幕末維新期小笠原島政策の「様相」―(『人間文化論叢』第6巻、平成十六年)。
- 2 註1拙稿八一―二頁。
- 3 磯野直秀「小笠原島真景図」解説(国立国会図書館電子図書館、同資料の項)。
- 4 東京都教育庁生涯学習文化課編・発行『小花作助関係資料調査報告』(平成四年)。
- 5 『小笠原嶋図絵 附録一卷』(小笠原島教育委員会、平成二十一年)
- 6 「壬戌五月二十六日 一番丸にて母島渡海之時港より西海上十里餘之眺望之図 久之写」「壬戌六月十三日 南島より北島に帰りし時西に七理程沖より眺望之図 久之写」
- 7 「久之」の名については、文久二年八月二十七日から文久三年五月一日まで島に滞在した本草学者、阿部樸齋の調査記録『南嶼産物志』の註記に見いだすことができる。(平野満『文久年間の小笠原島開拓事業と本草学者たち―小野荅庵(職愨)・宮本元道・井口栄春・栗田万次郎・阿部樸齋―』(『参考書誌研究』四九、平成一〇年)三四頁。
- 8 註1拙稿八一―一頁。
- 9 樸齋の詩作については、平野満『幕末の本草学者阿部樸齋の年譜』(『参考書誌研究』五六、平成一四年)参照。
- 10 江戸後期における実景図と風景趣味の問題については、拙著『江戸期実景図の研究』(中央公論美術出版、平成二五年)第四章「実景図」と同時代思潮との関わり」第二節「名勝」の探究―「風景趣味」と実景図―(二二六―二二九頁)参照。

11 『出放題集』第二丁表所収。

12 同右書第二丁裏所収。

13 註1拙稿八一―三四頁、「2 港と祠―領有の根拠」参照。

14 同右。

## 【図版出典】

図3-6 『小笠原嶋図絵 附録一卷』(小笠原島教育委員会、平成二十一年)

## 付記

本稿の執筆は平成二六年七月、小笠原村の依頼による講演(於小笠原ピジターセンター)および滞在中の調査・視察を契機とするものである。来島の機会を授けて下さった小笠原村ならびに「咸臨丸子孫の会」、調査・視察に御尽力頂いた小笠原村役場島田綱子氏・大津源氏に心より感謝申し上げます。